
Im i t a t i o n R i n g

田中智成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Imitation Ring

【Nコード】

N6353A

【作者名】

田中智成

【あらすじ】

機械都市ディアラムは他国よりも遥かに進んだ文明をもつ国である。そのディアラムで最も影響力のある大企業で医者として働くグレディは、次第に国をも巻き込む大きな波に飲まれていくこととなる。

プロローグ（前書き）

とても長いお話です。話が進むにつれ、矛盾点も出てくると思いますが、気長にお付き合いください。

プロローグ

縦令 たじえ 君が世界の何処にいても必ず君を助けに行く。

縦令 君が望んでいなかったとしても。

君のことだから、守られるのは嫌だといいそうだけれど。

君は確かに助けを求めているのだから…。

君を守りながら、君と一緒に戦いながら、この世界を旅できたら
きつと楽しいだろう。

縦令 君の前に姿を現すことが叶わなくとも。

君は自分の未来なのだから。

一週間以上も続いた雨はようやく完全に途絶えそうだった。先ほどまで少し残っていた灰色の雲も流れ、空は水を張ったように澄んでいた。

雨は天からの恵みとも言われるが、この国にとってはただうつろいしい存在でしかなかった。多くの化学物質を含んだ雨は、逆に植物の成長を妨げ、人体に少なからず影響を与える。このまま雨がやまなければ出港はさらに遅れることになっただろう。

旅商人のジャンは出港の合図である汽笛を聞き、慌てて乗船の手続きをして船に乗り込んだ。

「時間通りに来ていたかないと困ります」

ジャンのお蔭で一度しまったタラップを再び戻すことになった若い船員は、少し迷惑そうに注意した。

「あいすいません。何かあったらしく道が混んでいましたね……。

いや、申し訳ない」

近くの乗客たちは無遠慮に好奇の目をジャンと彼の背中の大きな荷物に向けていた。視線に耐えられなくなり、ジャンは大きな荷物

を揺らし、逃げるようにこの場を去った。

改めて汽笛が鳴り、今度こそ船は港から離れた。港の喧騒が徐々に遠くなり、やがて聞こえなくなったが、船からはまだ港が見える。ジャンは完全に港が——その島が見えなくなるまで、動くことなく島を見つめた。

そうしないと不安でならなかった。自分は本当にあの国を出たのか？ と。馬鹿らしいとわかっていたが視線を逸らすことはできなかった。

ほどなく島は完全に見えなくなり、船からは水平線だけが見えた。小さく息を吐き、ジャンは甲板へ向かった。

ジャンが乗っている船は旅客船ではなく定期連絡線である。どこが違うのかといえば、個室がないことだろうか。もちろん旅客船に比べれば設備は劣り、居心地も悪いかもしれないが、休憩所も屋台もあるのですほど不便は感じないだろう。値段も安いためほとんどの旅行者が利用していた。

久々の連絡船のためか船は人々でごった返していた。中でも甲板の賑わいは暗い気分さえもふっとんでしまいそうなものだった。あちらこちらでジャンと同じような旅商人が露店を出していて、威勢の良い声が行き交っていた。

ジャンは他国から出稼ぎに来た商人である。二ヶ月程前にあの島国——ディアラムに来たのだが、国の実情に嫌気がさし、予定よりもはるかに早く故郷に戻ることにした。

遙かに進んだ文明。老いも病もなく、人々は皆王侯貴族のような暮らしをしている——他国ではそんな噂が流れていた。何しろ潮流の関係で気軽に船を出して行ける国ではないから、そのような噂がながれるのも無理はない。おまけに近年になって規制が布かれたためになおさらだった。

「確かに比べものにならないほどの文明だったさ」

ジャンは吐き捨てるように呟いた。最初にあの地に下りたときはまだ夢を見ていた。しかし、それが壊れるのに時間はかからなかつ

た。もう考えるのも嫌である、というように首を振り、柵に寄りかかり海を眺めた。

ふと横を見ると、自分と同じように海を見ている男が目に入った。二十代中頃で短い黒髪に眼鏡をかけた背の高い男だった。全身真っ黒な姿のせいもあるのか、この天気とは反対に陰気な雰囲気をしており、それがやけに目を引き、ジャンは男に気づかれないように横目で観察していた。

「――おう！ ジャンじゃねえか」

突然肩を叩かれ、ジャンは驚いて情けない声をあげた。

「……ああ、カルロかい！ 同じ船とは奇遇だね」

こんな所で同郷の人間に会えるとは思っていなかったのでジャンは素直に喜んだ。

「でもお前さんあと半年はいるんじゃないのかい？」

カルロは陽に焼けた顔に苦笑を浮かべた。

「そのつもりだったんだけどよ。どうにもあの国は俺の性に合わなくてな。まあ、稼ぎは結構あったな」

「俺と同じだね。いくら文明が発展しても花が咲かない国はもう、人が住むべき場所じゃない」

皮肉を込めてジャンは言った。

「ああ……。夢を見ていた俺らが馬鹿だったよ。天国なんてどこにもないってことがわかった」

「俺には天国があるよ。愛する妻と子供たちが待っている故郷が俺にとっての天国さ」

「よくそんな恥ずかしいことが言えるな」

「負け惜しみとしか聞こえないね。お前さんも早く良い嫁さん見つけて天国をつくることだな」

「余計なお世話をどうも。まあ、あの国に天国を夢見てがっかりする人間は減るかもな」

ディアラム製の煙草をくわえ、カルロは呟いた。

「どういうことだ？」

「今より規制を強くするらしい」

「……なんのために？」

「さあ？ 国家元首が殺されたことも関係あるんじゃないのか？」
カルロの言葉にジャンはギョツとした。

「殺された!？」

「ん？ なんだ知らないのか？」

ああ、とジャンは呟いた。道が混んでいたのはそのことも関係あるのだろうか。一体この国はどうなっているのか。

「ジャンはビヤクタンで下りるんだろ？」

ディアラムにはもう興味が無いのか、カルロは話題を変えた。

「もちろん」

「それじゃあ、一緒だな。俺はちいとばかり寝てるからよ。何かあったら起こしてくれな」

そう言って船内へと向かうカルロにジャンは軽く手を振って答えた。さて、自分は小遣い稼ぎに露店を開くことにするか。

ジャンはさらに人が多く、賑わっている方へと移動した。

背中の荷物を下ろし、中を開ける。目に飛び込んできたのは二人の息子へのお土産の自動車のおもちゃと妻へのディアラム製のブローチだった。故郷にいる家族の顔を思い浮かべながら商品を並べ始める。もう少しで愛しい家族に会えると思うと顔がにやけてしまう。人の気配にふと顔をあげると目の前に男が立っていた。先ほどの若い男だ。煙草をくわえ、どうも不器用そうに火をつける。まるで慣れていないように。次の瞬間、男は思いきりむせていた。その様子にジャンは自然と首をかしげた。

男はむせながらもジャンが並べた商品を見ていた。

「かわいいわね」

若い娘の声にジャンは我に返った。娘はしゃがみこんで指輪を一つ手にとった。

「すごく安いけど、本物なの？」

「お嬢さん、こんなに綺麗で可愛らしく、しかも手作りの一点もの。」

それでこの値段！」

ジャンはそこで一旦言葉をきって、にっこりと娘に笑いかけた。

「——もちろん偽物です」

おどけるように肩をすくめたジャンに娘は笑った。これくさい、と娘はピンクの石が三つついた指輪を買っていった。人が次々と集まってきた。

「それ、もらおうか」

落ち着いた静かな声が聞こえた。例の男が紅い石のついたシルバ―の指輪を指差していた。近くで見ると眼鏡の奥の瞳が驚くほど深い色をたたえているのがわかった。

「毎度！」

ジャンは指輪を男に渡した。無造作にお金を渡し、男は人ごみの中へと去っていった。もう煙草にむせることなかった。ほどなくすると幸いにして商品がすべて売れた。

船内へ戻ろうかと考えていたが、ジャンはどうか気になり、急いで露店を片づけ、男を捜した。

露店を開いていた場所から少し離れた柵の側で男は眩しそうに空を仰いでいた。久しぶりの澄んだ青空に、男は先ほど買った指輪をかざしていた。シルバ―の指輪もその紅い石も光を受け輝いている。

「気に入ってくれたかい？」と声をかけようとしたが、ジャンは言葉を飲みこんだ。男が泣いているように見えたからだ。実際には男は涙を流してはいなかったが、その姿は確かに泣いているように見えた。

男は指輪を握り締め、目を閉じていた。まるで祈りを捧げるように。

次の瞬間、男は指輪を海に向かって高く、遠く投げたのだった。ジャンは思わず目を見開いた。何も言えず、スローモーションに感じられる指輪の軌跡をただ見ていた。

指輪は空の青から海の青へと落ちていった。ジャンは指輪が海底に着く音が聞こえたような気がした。

自分が精魂込めて作ったものを投げられていい気はしない。だが、ジャンにはその行為が男にとって大切な意味を持っていることを切に感じた。自分でも意識しないうちに自然と声をかけていた。

「――こんなに澄んだ青い空は久しぶりですね」

口から出た言葉はあまりにも他愛のないものだった。

ジャンの言葉に男はゆっくりと振り返った。

煙草を一口吸い、一呼吸置いてゆっくりと吐き出す。

何も言わずに男は微笑んで軽く頭を下げた。そして、そのままジャンの横を通り過ぎていった。賑わいを見せる人々の中に男はそのまま消えていった。

「おい、ジャン！　いつまでもそこにいないで中で一杯やろうぜ」
寝ていたのではなかったのか、船内から出てきたカルロは顔を昼間から赤らめていた。

「おう、いいな！　今行くよ」

そう言い、ジャンは旧友の元へ走って行った。
相変わらず空は雲一つなかった。

第一章 春の初めに

1

空は雲一つなく、悲しみも憎しみも忘れてしまいうくらいに澄んだ水色をしていた。季節は春の初めで、柔らかな陽の光りと爽やかな風が、自然と人々を和ませた。

いつも室内にこもってばかりの彼女もこの日は珍しく外に出ていた。何も考えずにただぼんやりと芝生に座り、煙草を吸っているだけのようだったが。それでも彼女は小鳥の囀りや時々吹く風に心地よさそうにしていた。その様子に軽く笑み、グレディは白衣のポケットに手を入れたまま彼女に声をかけた。

「アイリ、何してんだ？ こんな所でぼーっと」

不意に後ろから声をかけたが、彼女―アイリは驚いた様子も見せずに肩越しにグレディの姿を確認した。

「ぼーっと煙草を吸っていただけよ。あなたは？」

そう言ってアイリは立ち上がり、自分より頭半分ほど背の高いグレディを見上げた。

「煙草を吸っている女が目に入ってね。注意しに」

グレディはアイリの手から煙草を取り上げ、「灰皿」と手を出した。

「わざわざ？ 事務局の人間でもないのに」

アイリは素直に携帯の灰皿を渡す。

「喫煙禁止の場所で煙草を吸っている人間を見たら注意するのが当然だろ？」

「優等生ね」

揶揄するようにアイリは言ったが、悪意は感じられなかった。まさか、とグレディは軽く笑って揶揄に答えた。

「灰皿を携帯しているのは、まだマナーがいいよな」

灰皿の蓋を開けグレディは思わず苦笑をもらした。灰皿にはこれ以上入らないのでは、というほどに煙草が押しこまれていた。グレディは手にした煙草を無理やり満杯の灰皿に押し込み、蓋をした。

「壊さないでね」

「壊れそうなくらいに煙草を吸うほうが悪いんだよ、お嬢さん」

グレディは灰皿をアイリに返した。

「それにしても、女は煙草を吸うなどとは言わないが、客観的に見てお前は吸いすぎだぞ」

常にアイリには煙草の匂いが付きまとう。けだるげに紫煙をくゆらせている姿は様になるが、グレディはそれにどこかもの悲しさを感じてしまう。

「落ち着くのよ、なんかね。やめようと思ったこともないわ」

アイリは背中まである長く真っ直ぐな髪をうるさそうにかきあげ、グレディに背を向け歩きだした。その先には灰色がかった大きな建物が無機質に建っている。広大な敷地にいくつか存在する建物の中で、一番大きな建物である。

グレディはその場で、正面の建物を見つめた。六百人ほどの人間がその建物の中で働いている。それぞれの目的を持って。

「戻らないの？」

数歩先でアイリが振り返ってこちらを見ていた。ふと自分の妄想から抜けだし、グレディは軽く笑んだ。グレディが歩き出すと、待つことなくアイリも再び歩み始めた。追いつくとアイリは前を見つめたままグレディに話しかけた。

「あの建物がどうかした？」

「味気ないなと思っただけだよ」

八階建てのそれは決して高い建物とはいえないが大きさでは都市の中でも有数だ。建物の外を一周するだけで優に十分はかかる。その一番大きい建物を『本館』と呼ぶ。特に趣向を凝らした名前でもない。

「私には要塞のように見えるわ」

なんでもないようにアイリは言ったが、グレディにはその言葉に彼女が組織に抱いている感情が表れているように思えた。ただそれはグレディの思い込みでしかないのかもしれないが。

「そうだな、絵でも描くか？ パステルカラーで花をたくさん描くんだ。外壁全部に。ずいぶんとかわいらしくなるぞ」

言ってアイリを見ると、その深い色の瞳と目が合った。しばらく後、アイリは微かに声をたてて笑った。笑い顔は意外なほど彼女を幼く見せた。普段の大人びた雰囲気のせいで忘れてしまうが、その笑顔を見て彼女が自分よりも年下であることを思い出す。

「知らなかった。あなたがそんな子供っぽい発想を持っているなんて」

「誰だって子供の心をどこかに抱いたまま大人になってるんだよ。アイリは何を描く？」

アイリは上を見上げ、静かに言った。

「空、なんてどう？ 今日みたいな澄んだ水色を壁一面に塗るの。雲一つ無い青空をね」

「物足りなくないか」

じゃあ、とアイリは微笑む。

「紅い風船を飛ばすわ」

「黄色い風船も映えるんじゃないか」

穏やかな空気が二人の間に流れていた。さらに他愛も無いやりとりをしているうちに、彼らの仕事場がある本館に着いた。

外気の心地よさになごりを感じつつも二人は建物の中へと入っていく。建物の中は相変わらずざわめきだっていた。そんな中を二人は肩を並べて歩いていた。受付嬢が二人を認め軽く頭を下げる。

壁も床も天井も白い内部は清潔感を感じさせるがどこか機械的な冷たさも感じた。グレディはいつもこの場所のざわめきに言い表せない違和感を覚えていた。

何も言葉を交わさずに二人は歩く。突き当たりに硝子張りのドア

があり、アイリはカードを取りだし、壁に取り付けられている機械に通した。グレディもそれに続く。ピツという電子音がしてドアが開いた。ここから先は社内の人間しか入れないようになっていいる。

——機械都市ディアラム。

優れた技術力と科学力で他の国や都市などよりも遙に進んだ文明をもつ都市である。それでもここ数年でディアラムの製品——機械が少しずつ出まわるようになった。だが、まだまだ値段は高く、それを手にするのは一部の限られた人間だけだった。

しかし、いろいろと便利になったディアラムだが、依然解決しない問題があった。

犯罪発生率。

便利さに比例するかのようにそれは年々増加の一方を辿っている。機械都市としてだけではなく世界有数の犯罪都市としても有名なのである。

グレディとアイリはディアラムにあるレイニング社という会社の社員である。とはいえ二人の立場はまったく違うといっても過言ではなかった。グレディはレイニング社の専属医として雇われているが、直接組織の経営に関わる事はない準社員である。しかも専属医といっても彼は社内で働く警備員や食堂の調理師、清掃員など専用の医者である。社にはもう一つ、正社員用の医局がある。一方、アイリは正規の社員、それも準幹部である。幹部候補生という立場で多くの部下をもつ若きエリートだ。本来ならそう気安く話す関係にはない。

「ねえ、あなたはいつまでここにいるつもり？ あなたがここへ来てもう二年、そろそろここを出てもいい頃じゃない」

ポケットからだした煙草を口に咥え、アイリは火をつけた。

「もう二年になるのか。アイリはいつからここにいるんだ？」

「十年前からよ。もっともその頃はまだ子供だったから、いつも一人で本を読んでいただけだったけど」

アイリは一口吸い、一呼吸置いて煙を吐く。

でも今は違うわね、そう言った言葉はどこか自虐的に感じられた。
「俺はまだここにいてるつもりだよ。いつかは、とは思うけどな。アイリはずっとここにいてるつもりなのか」

グレディの問いにアイリは何も答えなかった。黙ってたただ煙草を吸っているだけだった。

「――一緒に行かないか？」

しばらくの沈黙の後、静かにグレディが言った。言おうと思って口にした言葉ではなかった。ごく自然に流れ出た言葉だった。

グレディの言葉にアイリは足を止めた。それにつられるようにグレディも足を止める。

「俺とここを出ないか？ もちろん今すぐじゃない。ひとつの場所にいつまでもいないで、もっといろんな所に行って――」

「――あなたは何もわかっていないわ」

グレディの言葉をアイリは静かに遮った。漆黒の瞳がグレディを見つめた。悲しみとも憐れみともとれる、そんな曖昧な微笑みを浮かべていた。

そう言い残してアイリは一人エレベーターに乗り込んだ。扉がゆっくりと閉まる。

「何もわかっていない、か。」

低く呟いたグレディはアイリの曖昧な微笑が気になった。そしてそこに答えが隠されているかのようにただエレベーターの扉を見つめていた。

第一章（2）

2

昨日とは一転し、今日は雨が静かに窓を濡らす。グレディは社の敷地内にある社宅の自室にいた。座り心地の悪い椅子に腰掛け、窓の外の景色を眺めていたが、彼は見てはいるが外の景色など目に入ってはなかった。

準社員になり二年が経つが、結局自分は何一つわかっていないのだ。昨日のアイリの言葉に改めて考えさせられた。会社の目的も、どんな事をしているのかも。

いや、とグレディは思う。自分は知ろうとしなかったただけだ。興味なんて何もなかったのだ。長くいるつもりは最初からなかったのだから。

レイニング社は創立三百年の歴史ある会社である。もともとは子どもむけの人形を製造する会社だった、ということを知っている者はそう多くはない。しかし、その当時の人形レインドールは、コレクターの間で今も高額で取引されるほど人気がある。現在は玩具分野からは手を引いているため、よりいっそうレインドールの希少性が高くなっているのだろう。

現在は主に警備保障、軍需産業、医薬品、機械製造などを主として経営を進めている。この国で一番力をもった会社であることは周知の事実であった。グレディがいるのはレイニング社の本部だった。都市にはほかに四つの支部がある。

椅子から立ちあがり、窓のブラインドを下ろすとベッドの上で横になった。静かに目を閉じると暗闇の中に昨日のアイリの曖昧な微笑みが浮かんだ。

（おまえはいつも悲しい目をしているな）

二年前、初めてアイリと出会った時のことを思い出していた。

出会った場所はある幹部の男の部屋だった。部屋に入るとソファに一人の女性が座っているのが目に入った。女性はグレディに気がつくのと立ち上がり、口元だけで小さく微笑んだ。毅然とした態度にダークブルーの髪と漆黒の瞳がとても印象的だった。

何を話したのかはよく覚えてはいなかったが、印象だけは今でも覚えていた。初めて会ったときからアイリの瞳はどこか悲しそうに見えた。その瞳にグレディは惹かれた。ひと目で放っておくことができない存在になっていた。それが恋愛感情によるものとは考えてはいなかったが。

渴いた音が部屋に響く。ドアをノックする音でグレディは現実に取り戻された。身体を起こしドアを見つめた。

「どうぞ」

昨日のこともあってアイリが来たのかと期待した。しかし、部屋に入ってきたのは四十代前半の背の高い男だった。秀でた額の下にある琥珀色の目が聡明さを感じさせる男だった。

「なんだか期待外れといった感じだな。誰かを待っていたのか？」

「別に。まさか一介の医者の部屋に会社の幹部の人間が尋ねてくるなんて思いもしなかっただけです」

男はレイニング社の中でも中心に位置するほどの立場にあった。

そしてグレディを準社員に引き抜き、アイリを紹介した男でもある。「自分で訪ねておいて、私も驚いたよ。まさか部屋にいるとは思わなかったな」

本当ならグレディは今、本館一階にある彼の仕事場にいるべきだった。

「ローズが嘆いていたよ。先生はじっとしていることがない、探るのがたいへんだってね」

進められた椅子に座り男は苦笑した。それはごく親しげに感じられた。

グレディは正社員との関わりがないに等しい。そのため、面識が

ある正社員は数人だった。社の人間に恐れられる幹部の人間でさえ、彼は一人を除いて名前すら覚えていなかった。

「四階の医局と違ってこっちはヒマなんですよ。向こうは毎日野戦病院なみの忙しさだそうですね」

グレディに覚えられている唯一の幹部――ウォルター・ブレイナードはそんな彼の言葉に苦笑した。

「ディアラムだからね、街に出ればいつでも銃撃戦さ。怪我人が多いのは仕方ない」

ブレイナードの言っている事は明らかに大げさだったが、そのことについてグレディは何も言わなかった。

「それで何の用ですか？ 幹部のあなたがわざわざ来るなんて」慣れた手つきでコーヒ―を淹れ、ブレイナードに渡した。

「ありがたい。そうだなとても忙しいみたいだから用件を伝える事にしようか。――グレディ、正社員にならないか？」

「正社員に？」

「ああそうだ。はっきりいって私は君のことをかっている」グレディの様子を伺い続ける。

「ここにきてもう二年だ。社にもだいぶなれただろう。そろそろ正社員にあげてもいいと思っている。いろいろな面で会社の力になってほしい」

グレディはカップの中の黒い液体を見つめたまま話を聞いていた。「正社員にね……。せっかくのお誘いですが、俺がいなくなると医務室はパニックになるんですよ」

顔をあげてグレディは言った。

「まったく矛盾しているな。そう思うなら、せめて勤務時間内は仕事場にいてほしいものだ」

ブレイナードはグレディの言葉に珍しく声を出して笑った。

「とにかく、俺には毎日怪我人を相手に仕事をするのが向いているんですよ」

再びカップの中へと視線を落とすグレディにブレイナードは静か

に告げる。

「すでに新たな医者採用を決めている。来週には仕事に入るだろう」

グレディは視線をブレイナードへ向けた。

「聞いてないな」

「ああ、言っていないからな」

しれっとブレイナードは答えた。

「君はこの話を受けると思っているからな」

自身たっぷりな様子にグレディは苦笑した。

「どうして俺を正社員に？　そもそも準社員に誘ってくれたのもあなただった。準とはいえ新米医師の俺が大企業で働けるだけで恵まれていると思っていたんですよ。それが今度は正社員ときた。何か裏があると考えてしまうね」

「ひねくれているな。言っただろ？　私は君をかつていると」

「随分な過大評価をどうも。もしかしたら会社をのっとうと企んでいるかもしれませんよ」

「決して過大評価ではないと思っているよ。何度か話をすればわかることだ。君が会社をのっとうと、もしくは潰そうと考えていてもかまわない。野心がない人間なんて面白くもなんともないからな。まあ、私以外の人間がどう思うかは別だが」

つかみどころがない笑みを向けて呟く。

「もつとも、過ぎた野心は身を滅ぼすことのほうがおおいがね」

ブレイナードは笑っていたが、グレディは一緒に笑うことはできなかった。

「もともと君のことは正社員として雇うつもりだった。学校に知り合いがいてね、優秀な学生がいると教えてもらったんだ。ただあの時はちよūd準社員の医者がやめてしまっていたなくてね。会社のことをよく知ってもらうためにもまずは準社員から働いてもらうことにしたんだよ」

「幹部がわざわざ来るなんて人手不足の会社なんだなと思いました

よ」

初めて会ったとき、グレディはまだ医学生だった。卒業してもデアラムの現状では医者として働くことは難しかったから、グレディにとって願ってもない話だった。医術の腕を磨くことはできない職場だったが、それを除けば現状に不満はなかった。

「正社員になったら俺は四階の医局に勤務ですか」

そうなのだろうと思っていたが、案に反してブレイナードは否定した。

「いや、君には別の仕事をやってもらいたい」

「俺は医者ですよ。医療以外にできることなんてありませんが。医薬品の開発も専門外のようなものですから」

「社の窓口になってほしい」

「窓口ですか」

そんな人と関わりあうような仕事は自分には向いていない、とグレディは思う。そういうのはもっと人当たりのよいにこやかな人間がやるべきだ。

「社と国、あるいは市民との。とはいっても難しく折衝役だと考えることでもない。グレディは市政に興味はないか？ 都市の現状を知っているだろう。わが社には都市のために行動を起こすことのできる力がある」

「そうでしょうね。財力からいっても国を左右できるでしょうから」
「行政だけでは限界がある。それで近頃は軍部の力にも頼っているわけだが、それでも細かい部分は行き届いていない。犯罪者の検挙や失業者対策、福祉についても国がどれだけの成果をあげたと思う？ 何も結果は出ていないさ。反政府軍もそのままだ」

富裕層と下級層の差ははげしく深い。下級層では、まだ言葉もろくに話せない子供が街で働かないと生きていけないほどのだ。何の結果も出さない国の仕事をよく思わない人間が反政府軍を作り、その中の過激な連中が武力行使にでることもあった。デアラムの治安は一向によくならない。

「わが社では五年ほど前から市政にも力を入れ始めた。国ではできないことを行うために。グレディにはそこで力を発揮してほしいと思っている」

グレディは小さく息を吐いた。

「ご高説は承りましたが、俺には向いていないと思いますよ」

「すぐに返事をくれとはいわないさ。ゆっくり考えて結論をだしてくれればいい」

興味のないそぶりでグレディはブラインドの下りた窓に目をむけた。もともとひとつのことに縛られることが嫌いな彼は、組織に属することももちろん好きではなかった。

「君次第では今より給料もあがり、こんな質素な部屋とも別れることができる。待遇は格別によくなる。ディアラムに暮らす人々の力に自分になれることができるんだ。けっして悪い話ではないと思うんだが」

一旦言葉をきって、それに、とブレインードは静かに言った。

「アイリ・カーシュナーも喜ぶんじゃないかな」

窓に目を向けたままグレディは小さく笑った。

「何を勘繰っているのか知りませんが。彼女はそんなことで喜ぶような女なんですか」

「なんだか含みのある言い方に感じられるな」

ブレインードは僅かに片眉を上げた。

「俺よりあなたの方がよく知っている、と言いたいだけです」

「妬いているのか？」

グレディの言葉に面白そうにブレインードは笑った。

「まさか」

グレディは気にする様子もなかった。

「まあいい。時間はある、ゆっくり考えてくれ」

笑いの残る顔でブレインードは椅子から立ちあがった。

「コーヒー御馳走様。それでは、いい返事を待っているよ」

ドアが閉まるとやけに静けさを感じた。雨音も聞こえないほどに。

第一章 (3)

3

本館一階にグレディが所属する医局があった。ここの医務室にやってくるのは掃除員や調理師など組織に直接関わりをもたない準社員だけである。

四階に正規社員専用の医務室がある。グレディはまだ一度もそこへ行ったことはないが、一階とは比べものにならないほどの設備らしい。

「――先生！ どこに行ってたんですか？」

医務室のドアを開けた途端、声が飛んできた。看護師のローズがどこか怒ったような顔をしている。波打つ栗色の短い髪と大きな瞳が活発な印象を与える女性だった。

「部屋に」

そっけなく言って、グレディは壁にかかっている白衣を無造作に羽織った。

「ブレynaードさんが探していましたよ。会いましたか？」

「あったよ。部屋に来た」

椅子に座ると机の上にカップが置かれた。ハーブの良い香りがグレディの鼻孔をつく。

どうぞ、とお茶を出してくれたのはローズと同じ看護師のマツノだ。医者と看護師が二人、このたった三人が一階の医局で働くすべでだった。

「……先生、ここやめちゃうんですか？」

ローズの言葉にグレディは口に運びかけたカップを机に戻した。
「なんで」

「だって、ブレynaードさんが来週先生の代わりに新しい医者がく

るって」

ローズは今にも泣きそうな顔をしていた。良くも悪くもすぐに感情が表に出てしまうのがこの娘の性格だ。

「あの男話したのか」

「せ、先生……！」

慌てたようにマツノが言った。マツノはここで働くようになって長い。四十に手が届くころのマツノはふっくらとした顔に苦笑を浮かべた。

「それで先生は本当にここをお辞めになるのですか？」

「いつかはな。けどそれは今じゃない」

小さくグレディは息を吐いた。

「正規の社員にならないか誘われた。でもどちらにしろここを辞めるつもりはないよ。まあ、新しく医者がかかるなら俺はお払い箱だろうけどな」

そんな、とローズの声は沈んでいる。

「先生はどう考えていらっしゃるのですか？」

マツノはどこか心配そうにグレディを見ている。自分より十以上も年下の若い医者を買ツノは慕ってくれている。

「さあなあ。現状に不満はないからな。……二人はずっとここで働くつもりなのか？」

「そうですね。私は働ける限りは、と考えています」

マツノが答え、ローズは手を挙げた。

「私がお金が貯まったら辞めます」

「へえ、それは初耳だな」

ローズは無邪気に笑う。

「生まれてから二十年ずっとここで育ったんです。他の国のことなんか何も知らないし。だからいつかディアラムを出て、いろんな所へ行ってみたいんです」

ローズの大きな瞳はきらきらと輝いていた。この場所にあっても彼女はとても真っ直ぐで明るかった。昨年入った彼女はアイリと二

つしか違わないのにずいぶん違うものだ」とグレディは思う。

「先生、知っていますか？」

「何を」

「西の大陸には魔法が今も存在しているんですよ」

魔法、魔術、それらはディアラムには存在しない。使える人間もない、ということになっている。代わりに機械が存在するのだ。それこそ魔法のような。

「ああ、知っている」

「花もたくさん咲いているんですよ。この島の外の世界には本物の花がたくさん咲いていて、きっとすごく綺麗なんでしょうね」

おかしいことだとグレディは思う。他国の人間はディアラムに夢を見て、ディアラムの人間は他国に夢を見る。

「ディアラムを出て、いろんな国の小さな村や町に行って、そこで医療の手助けをするのが夢なんです」

照れたふうにローズは微笑った。その夢はローズらしくもあり、微笑ましかった。マツノも笑んでいる。

「それじゃあもっと勉強しなきゃいけないな。少なくとも、手助けできるくらいにはならないと」

「今だってできていますよ」

抗議するローズに、どうかな、とグレディはからかう。さらに抗議の声をあげたとき、医局のドアがそっと開いた。

「失礼します」

静かに中に入ってきたのは灰色の髪をした少年だった。グレディは僅かに苦笑する。

「誉められたもんじゃないな。おまえの医局は四階だぞ」

少年はファルガという。まだ十六歳だが、レイニング社の正社員である。能力主義を採っているため採用に年齢はあまり関係はない。

「正社員はあまり準社員と関わりを持つべきじゃない」

「グレディさんには言われたくないですよ」

グレディは肩をすくめた。

「で、どうした？」

「指を怪我しちゃったんです」

言われてみると確かに右手の人差し指から血が出ている。

「その程度でわざわざ来るなよ」

「給料泥棒と言われないようにわざわざ仕事をもってきてあげたんです」

「それはどうも。ローズ、消毒液と絆創膏」

グレディは内心笑っていた。ファルガはローズに淡い恋心を抱いているのだ。ローズに会いにちよくちよく顔を出すのはなんだか微笑ましい。もっともローズのほうは全く気がついてはいないようだが。もともと面倒見のいい彼女は、ファルガのことを弟ぐらいにしか見ていないのだろう。

「――あ、先生、見てください。虹が架かっています」

ローズが窓を指差した。見ると、いつのまにか雨は上がっていた。「綺麗ですねえ」

外には大きく虹が出ていた。煩わしい雨が唯一もたらしてくれるまともなものが虹であった。

窓の外に目を向けていたグレディはふと立ち上がった。

「先生？」

怪訝そうにマツノが声をかけた。

「ちょっと出てくる」

白衣を着たまま、グレディはドアノブに手をかけた。振り返り、ローズに軽く笑みを向けた。

「俺もささやかながら、おまえの夢に協力してやるよ。ファルガの手当ては任せる。あとの仕事も今日は任せたからな、しっかり勉強しろよ」

先生、と言うローズの困ったような声を背にグレディは医務室を出た。

第一章（4）

4

曇り空から光りが射し込み、水溜りがキラキラと光っている。虹は依然として空にかかったままだった。

グレディは本館を背に立ち、正面から歩いてくる一人の人物を待っていた。その人物は最初グレディに気づかず ゆっくりと歩いていた。だが、ふと気づいたらしく足を止め、少し微笑んでから足早に歩いてきた。

「珍しいな、外出だなんて。仕事でもなさそうだし」

やって来た人物――アイリにグレディは言った。

「ルークに話があるって言われて。だけど行ってみたらただお茶したかっただけと言われたわ」

ルーク・シーゼントはアイリと同じく準幹部の男だ。彼もまだ若く、その顔には少年のあどけなさを残していた。レイニング社の中でグレディが一番親しくしている人間である。

「あなたはまた仕事を抜け出してきたみたいね」

「アイリに聞きたいことがあって」

「何かしら。手短にお願いするわ」

「この会社をやめようと思ったことは？」

「ないわ」

即答だった。グレディは続けて質問をする。

「おまえは俺がここにいることに反対なのか」

昨日アイリが言ったことはそんな風にも聞こえた。グレディにここを出るようにと忠告しているように。

「いろんな意味にとれるわね。質問が抽象的すぎて答えられないわ」
答えるつもりはないのだろう。グレディは小さく息を吐いた。

「悲しい瞳だな」

アイリの瞳を見て言葉がグレディの口をついて出た。アイリは何も言わずにグレディの瞳を見てから空を見上げた。

「不思議な人……」

顔を戻してただ一言そう言った。グレディのほうを見ることはなかった。

「私があなたと会ったのは二年前が初めてだったわ。だけど変ね、なぜかあなたの眸を見るとずっと昔から知っているような気がしてしまう」

淡々とした言葉だったが、それはぼろりともらした彼女の本音のようにも聞こえた。

「もしかしたら昔どこかで会ったことがあるかもしれないな」

グレディは口にしながらもそれはないと思っていた。昔あったことがあるのなら、忘れるはずがない。こんなにも印象的な目をもった女を覚えていないはずがない、と。

「そうだとしたら、面白いわね」

アイリ特有の口元だけでの微笑が浮かんだ。

「――グレディ・カニングラム。ディアラム、フレサ地区出身。十七歳でエンフェル地区の医学学校に入学、二十二歳のとき優秀な成績で卒業。卒業後レイニング社の準社員として採用される」

グレディの反応を窺うようにアイリは言葉を切った。アイリの口から出た言葉にグレディは少なからず驚く。彼女はまったく自分の経歴を知らなかったわけではなかった。それは最近知ったのか、それともグレディがここに来たときから知っていたのか。

「なかなか輝かしい経歴だろ？」

そうね、とアイリは煙草をくわえた。

「人事課で調べたのか？」

「だったら」

「だったら光栄だな。俺に興味を持ってくれたってことだろ？」

その言葉にアイリは火をつけようとした手を止めた。

「嬉しいね、少しでも俺のことを知ろうとしてくれたなら」

「そんなんじゃないわ」

静かに言い、アイリは煙草に火をつけた。

「よろしければ、もっと詳しくお教えいたしますよ」

おどけたように言うグレディにアイリはくすりと小さく笑った。

「必要ないわ。本人から聞かなくても知ることはできるもの」

煙を吐きながらアイリは言った。

「社員のことは全部調べてあるってわけか」

「家族構成から何までね。あなたも自分の調査書を見てみたら？

案外自分の知らなかった事実があるかもしれないわよ」

なるほどね、グレディは苦笑した。さすが、ディアラム一の大企業だ。たとえ準社員であろうと得たいの知れない人間は雇わないってわけか。

「それで？ アイリは俺の調査書を見たのか？」

「一準社員の調査書をみるほど暇じゃないのよ」

ぴしゃりとしたものの言いにグレディは肩をすくめた。見ていないのなら誰かから聞いたのだろうか。

「それじゃあ、正社員ならどうなんだ？」

アイリがグレディを見た。一瞬、驚いたような表情が浮かんだ。

「それとも準幹部ともなれば一正社員の調査書にはご興味ありませんか？ 出世したら興味を抱いてくれるんですかね」

「何を言っているの。知ってほしいの？ そんなに面白い経歴の持ち主なのかしら」

「自分の知る限りつまらないと思うんですけどね」

でも、とグレディは続ける。

「幹部直々に正社員にならないかとお誘いを受けたんですよ」

今度は明らかにアイリは驚いた様子を見せた。彼女の知らなかった事実なのだろう。

「いつ？ 誰に？」

静かな声に僅かに動揺が見えた。

「今日、ブレインードに」

そう、と呟きアイリは煙草をゆっくりと吸って吐いた。

「どうするの？ その様子だとなんだか腑に落ちないみたいだけど」

「そうだろう。いかぶり過ぎな気がするからな」

「なら、断ればいいわ」

アイリは携帯用の灰皿に煙草を押し込んだ。

「アイリは反対なのか？」

アイリは何も答えずに煩わしそうに長い髪をかきあげた。

「長話だったわね、戻るわ——」

脇を通り過ぎようとしたアイリの腕をグレディは掴んだ。アイリは驚きもせず、ただ不快そうに眉を顰めグレディを見た。

「何？」

「答えてないだろ」

グレディの眼差しを受けてアイリはしばらく黙った。腕を振り払うそぶりもなかった。

「決めるのはあなた自身よ」

しっかりとグレディの目を見据えてアイリは静かに答えた。その深く強い眸にグレディは悲しくなる。どうしたらまだ二十歳そこそこの若い女がこんな目を持つようになれるのか。

「離して。あなたの立場をわきまえなさい」

事務的な口調を受けてグレディは反対にアイリを自分のほうへ引き寄せた。

「正社員同士なら構わないのか？」

「——馬鹿なことを！」

アイリはグレディの腕を振り解いた。すばやくグレディから離れ、背を向けた。

二人の間を風が吹きぬける。その風に運ばれてきたかのように、雨上がりの空気に懐かしさを感じた。なおも吹きつづける風にアイリの長いダークブルーの髪はなびいていた。

「偽り……」

か細い後ろ姿にグレディは静かに声を投げかけた。アイリの背中からは何の感情も読み取れない。

「人は偽りの自分を作り出す。本当の自分を他人に見せることは恐いよな」

しばらくの沈黙の後グレディは言葉を続けた。

「アイリはどうしていつも悲しい瞳をしているんだ？」

何も言わずアイリは本館に向かって歩き出した。動きにつれて髪の毛が揺れる。グレディから十数歩離れたところで足を止めた。

「……あなたはよく考えるべきね」

結局そのままアイリが振り返ることはなかった。

自分は彼女の背中を見つめてばかりだな。そう思い、自然と自嘲めいた笑いが漏れた。

手には細くひんやりとしたアイリの腕の感触がまだ残っていた。

自分の手を見つめグレディは手を握り締め、空を仰いだ。

曇り空はいつのまにか晴れていた。

第一章 (5)

機械都市ディアラムは小さな島国であるが土地に対し人が多く、人口密度が非常に高い。犯罪発生率が高いのも人口密度の高さが要因の一つになっている。

とくに歓楽街の密集ぶりは筆舌に尽くし難いものがある。正規の店の隙間をぬうように不法な店が構えられている。治安局が取り締まりに入ってもごちゃごちゃとした通りのせいで相手に逃げられてしまうのが常である。この都市の治安局は正常に機能していないのが現状であろう。

ディアラムは五つの地区にわかれている。レイニング社の本部があるここは都市の中心、エンフェル地区である。中心区であるため、この歓楽街は他地区よりもさらに複雑な作りになっている。初めて訪れた人間はまず間違ひなく迷い、いかがわしい店に迷い込み高額な代金を請求されるはめになる。

「相変わらず上品さのかけらもない店だな」

狭い店内を見渡してグレディは呟いた。その呟きにだみ声が飛ぶ。

「お上品な店がいいなら北へ行きな」

エンフェル地区の北にはいわゆる高級店が建ち並ぶ区域がある。

「誉めてんだよ。落ち着く店だって」

「そりゃあ嬉しいね」

カウンターに座ったグレディの前に店主のガロウが茶色い液体の入ったグラスを置いた。

ここは歓楽街の一角にある小さな店である。看板なんてものはなく、店に名前もない。この店を呼ぶときは「ガロウの店」とそのまま呼ばれる。店主のガロウは五十過ぎの腕っ節のつよい大男でグレディとの付き合いも長い。グレディはこの店に來ると帰ってきた、という思いが強くわいてくる。

「ただいま」

酒を一口飲み帰宅の挨拶を述べたグレディにガロウはお帰りと笑った。久しぶりに来たにもかかわらず、変わらずに迎えてくれるのが嬉しかった。

十四の時から二年前までグレディはここでガロウと暮らしていた。もつともその間の医学生時代は寮住まいだったのだが。ここはグレディの家だった。今もきっとそうなのだろう。

ふと思う。彼女に帰る家はあるのだろうか。

「今度は何を拾ったんだ」

思いにふけながらゆっくりとグラスに口をつけるグレディにガロウが声をかけた。

「犬か？ 猫か？」

グレディは笑う。

「何言ってるんだ。何も拾ってない」

「そうか。てっきりまた動物でも拾ってきたのかと思った。そういう顔をしているからよ」

ガロウは樽からジョッキに酒を注いだ。これは自分用の酒である。店にはグレディ以外に客はいない。

「よく拾ってきたからな。野良犬やら野良猫やらを、あれは迷惑だった」

「昔の話だろ」

迷惑だ、と言いながら、グレディが拾ってきた動物を見捨てることなくガロウは飼い主を探してくれたものだ。思い出しグレディは再び笑った。

「何も拾ってないよ。……でも、もしかしたら拾いたいのかもしれないな」

グレディの呟きにガロウは鼻で笑った。

「昔からほっとけない奴なんだな、お前さんは」

いいか、とガロウは充血した目をグレディに向けた。

「自分の能力以上のものを抱えこむんじゃないぞ。過信して自滅な

んて間抜けなことだけはするんじゃない」

思いのほか真剣な目にグレディは頷くことしかできなかった。ガロウは一つ頷きジョッキを飲み干した。ジョッキを乱暴に置く音に続いて、店の外の喧騒が大きくなった。グレディはドアに目を向けた。

「どうした？」

「騒がしいな」

いつものことだ、とガロウは気にもとめなかった。

「おまえはいつも静かなところにいるから気になるんだろ」

「そんなことない。確かに久しぶりだけど、何かあったんじゃないか？」

「何も起こらないことなんてない場所だぞ、ここは。最近はこのまんだ。物騒なのは相変わらずさ。特に近頃は子供がよくいなくなる」

「子供が？」

「ああ。こんな街じゃあ子供が消えることも日常茶飯事だ。たいした事件じゃない」

「本当にそう思っているのか？」

しばらくガロウは何も言わなかった。黙って空になったグレディのグラスを取り替えた。

「——ちくしょう、嫌な街だ。子供に手をださんでもいいだろうが」

やっぱりな、とグレディは思う。外見とぶっきらぼうな話し方で勘違いされやすいが根は正義感のある男である。子供が犠牲になることに憤っているのだ。

「治安局はあてにならない。国に期待はできねえ——」

ガロウが愚痴ったとき、店のドアが開いた。かろん、と鈍い鈴の音が響く。

入ってきた二人組の男にグレディは内心苦笑する。聞かれなかっただろうな。紺色の制服に胸のエンブレムは男たちが治安局の人

間であることを示している。しっかりとした足取りで二人に近寄ると軽く頭を下げた。よく訓練されたその静かな動きだった。

「治安局です。お尋ねしたいことがあるのですが」

「子供さらいのことなら知らねえぞ」

二人組みの男の若いほうが小さく苦笑した。

「いえ、そのことで来たものではありません」

「じゃあ何だ？」

「人を探しているのですが。こういった女性に見覚えはありませんか？」

言って男は懷から一枚の紙を取り出した。そこには若い女の絵が描かれ、女の特徴が何点かあげられていた。

金髪。碧眼。二十前後の若い女。

「べっぴんさんじゃねえかよ。この女がどうしたんだ？」

「殺人事件の容疑者でして」

男の言葉にグレディは軽く眉を顰めた。

「殺人事件なら珍しくもないんじゃないか？ 治安局がわざわざ聞いて回るなんて、この女は誰を殺したんだ？」

グレディの問いにも男は笑みを絶やさずに答える。

「職務に関わることで詳しくは答えできません。——見覚えはありませんか？」

「ないね。もしかして歓楽街全部の店に聞いて回っているのか？」

「それが仕事ですから」

グレディは感嘆する。ここに入っている店は五十、百なんてものではない。

「ご協力ありがとうございました。失礼いたします」

男たちは最後まで丁寧だった。

「子供のほうはどうなってんだ」

扉が閉まるとガロウが小さく叫んだ。再び自分用にジョッキに酒を注ぐ。

「あれは治安局じゃないだろ」

「何だって？」

「治安局の人間があんなに訓練されているか？ 一人は治安局の奴かもしれないけど、若い方は軍部の人間じゃないか？」

「何でそう思うんだ？」

「動きが静か過ぎるんだよ。ここは騒がしいから気がつきにくいけど足音が静かすぎだ。あれは相当訓練されているだろうな」

へえ、と面白そうにガロウはドアに目を向けた。

「軍部がでてくるなんて、とんでもねえことしでかしたんだな。あのべっぴんさんは」

「なんだか嫌な感じだな。巻き込まれるなよ」

「ガキが偉そうに。おまえこそ首をつっこむなよ」

「もうガキじゃない。ガロウこそいつまでも自分が若いと思うなよ。年を考えろよ」

「何を。まだおまえよりは動ける」

軽口を叩きあっているところに勢いよくドアが開いた。

グレイディとガロウは瞬間的にドアを見た。今度は男が一人、入ってきた。黒いコートに身を包み、黒い帽子を被っていた。目深に被ったそれで男の顔はよくわからなかった。

「軍部だ」

押し殺したような低い声が耳に入る。すでに手に銃が握られているのを確認し、グレイディに緊張が走った。男は一直線にグレイディの前までやってきた。先ほどの男同様にそつのない動きだった。やはり先ほどの男は軍部の人間だったのだろう。

（どうして軍部が）

ガロウも緊張した様子で男とグレイディを見ていた。

「グレイディ・カニングムだな？」

「そうだが。俺に何か？」

確認すると男は銃をグレイディに突きつけた。

「何をしやる！」

ガロウの抗議を男は軽く手を上げて制した。

「おまえに聞きたいことがある。両手を頭の後ろで組んで、カウナーに頭を伏せろ」

軍部に睨まれるような覚えはなかったが、グレディは素直に従った。後頭部に銃口を押し付けられた硬い感触がした。

「恋人はいるか？」

「……いない」

では、と低い声が続ける。

「アイリ・カーシュナーとはどういう関係だ？」

予期せずアイリの名前が出て、グレディは驚く。彼女に何か起きたのだろうか。

「レイニング社の社員だ。アイリ・カーシュナーを知っているだろうか？」

ああ、とだけグレディは答えた。質問は続く。

「二人の関係は？」

「ただの知り合いだ」

「おまえは彼女に恋心を抱いている。そうだな？」

彼女に恋心？ そんなことは考えたことがなかった。気にかかるのは恋とは違うものだ。グレディは確信していた。

「……違う」

そうか、という男の声にくぐもったガロウの声が重なっていた。伏せているグレディには何が起きているのかわからなかった。まさか、ガロウに何か……。

「今日、レイニング社の本部で彼女と抱き合っていたな？」

「抱き合ってなんかいない」

真面目に答えたあと、意外な音がグレディの耳に入った。ガロウの笑い声である。

なんだこれは。何かおかしい。グレディはようやく事態のおかしさに気が付いた。

「あー、ガロウさん！ 笑っちゃダメだって」

「いや、すまねえ。どうにもおかしくってよ」

よく知った声がガロウを笑ってたしなめた。この声は……。

グレディは勢いよく椅子から立ち上がり、銃を突きつけていた男と対峙した。

男はすでに帽子を取っており金色の髪が頭になっていた。まだ幼さの残る顔の男は楽しそうにグレディを見ていた。

第一章 (6)

ルーク・シーゼントはまだ笑いを引きずっていた。カウンターの向こうのガロウも大きな身体を揺すって笑っている。一人釈然としない様子でグレディはグラスの液体を飲み干した。

「ダメだよグレディ。そう何回も引かかっていたら。人間はね、学習する動物なんだよ」

悪びれた様子もないルークに怒る気も失せていく。ルークはよくこの手のいたずらをする。グレディにも仕掛けるし、ファルガにも仕掛ける。どうやらこの二人がよくひっかかるらしい。もう二十三になる男だが子供のような無邪気さがある。外見もまだ少年のようなのであるのがいけないのかもしれない。

どういいういきさつで出会い、親しくなったのかは覚えていないがグレディの一番の親友といってもよい男だった。

「それで何なんだ？」

「冷たいなあ。一緒に酒を酌み交わそうと思ったんだよ。部屋にはいなかったからたぶんここだろうと思って来たんだ。ガロウさん、カクテルちょうだい」

「あいにくカクテルなんて洒落ているもんはうちにはねえんだよ」
ルークとガロウもすでに顔なじみだ。ルークの注文にガロウも笑って答えた。

「わかってるよ。ガロウさんと同じもので」

おうよ、と答えガロウはすぐにルークの前にジョッキを置いた。
ルークは半分ほど飲み干すとグレディの肩に腕を回して小声で囁いた。

「で？ 本当に抱き合ってはいないんだな？」

「本当だよ」

腕は掴んだことは伏せておくことにした。

「よかったあ。いや、びっくりしたんだよ。本部の窓から二人が抱

き合っているように見えたからさ」

ルークはグレディから離れ、残りを飲み干した。

「それでグレディは正社員になるつもりなのかな？」

「考え中」

「何？ おまえにそんな話がきているのか？」

ガロウが驚いたようにグレディを見た。

「そうなんだよ。しかも幹部直々に」

「へえー。でグレディ、どうすんだ？」

「だから考え中だ。別に現状に不満はないしな。元々長くいるつもりもなかったから。それに釈然としないこともある」

「そう？ なにが釈然としないのかな」

「俺の仕事は怪我人の手当てをするぐらいだぞ。しかもふらふらと仕事中にいなくなることもある。そんな俺の何をもって正社員にしたいんだかわからない」

「なんだ、そんなこと」

ルークは笑った。すでに二杯目のジョッキを手にしていた。

「グレディはブレイナーさんのお気に入りだからだよ。あの人は気に入った相手の面倒見がいいからね。ま、気に入られることなんてめったにないんだけど」

「それだけなのか？」

「まさか。まったくの無能な人間になんて目はつけないよ。グレディは仕事のできる人間だと見ているからだろ。チャンスを与えたんだよ。自分を試すチャンスをね」

確かにこれはチャンスでもある。自分の能力がどこまで通じるかを試すことができるのだ。たいていの人間はレイニング社の正社員にならないかと誘われたら喜んで応じるだろう。今やレイニング社はディアラムを左右するほどの力を持った組織なのだから。

「ルークはどう思う？ 俺が正社員になることを」

問われてルークは軽く首を傾げた。

「僕に聞いてどうするの？ 僕はグレディが正社員になるなら応援

するし、そのままだとしても何も変わらないよ。どっちを選んでも
変わらずに友達だろ」

「ただ俺は飽きっぽいからな。ちゃんとやっていけるか心配なんだ。
正社員になったら簡単にやめることもできないだろ？ 今の気楽な
感じが気に入っているんだ」

「なら無理に正社員にならなくてもいいんじゃないか？ おまえは
何を悩んでいるんだ？」

「……そうだな、何を悩んでいるんだろうな」

自分に問うように言い、グレディは天井を仰いだ。悩みの原因に
思い当たることが多すぎて自分自身わからなくなっていた。

「でもさ、正社員になったらもしかして僕の部下になるかもしれない
いんだよね」

楽しそうな声にグレディは頭を戻した。

「うわ、なんか楽しいな。グレディが僕の部下だってよ」

ルークは嬉々として二杯目のジョッキを空けた。ガロウがすぐに
代わりのジョッキを置く。

「そうになったら僕のことはシーゼントさんと呼ぶように」

「それだけは避けたいな」

恐らく、ルークのことだから仕事中は部下として扱うだろう。そ
して見事な変わり身で仕事外では友達として接するのだろう。

「僕の部署に配属になったら、ということは実際にはファルガの部
下になることになりそうだな」

親しくはしているが、グレディはルークがどんな仕事をしている
のかは知らなかった。アイリとファルガについても同じだ。知って
いることはルークとファルガは同じ部署で、ファルガがルークの部
下であるということだけだ。

「それも勘弁願いたいもんだ」

なまじ正社員に知り合いがいるとややこしいことが起こりそうだ。
お互いやりにくいことになる。

「そう考えるとめんどろだな。ルークが上司でファルガも上司。正

社員になったら今みたいな口聞けないんだな。ファルガにフェアウエザーさんとか言わないといけないんだろ」

「ファルガは優秀なんだ。史上最年少の準幹部候補生だからね。間違いないグレディよりは上の役職だよ」

ちなみに、といたずらめいた笑みを浮かべてルークは言う。

「僕とアイリもね。そうだよ、アイリが上司の可能性もあるね」

「一番避けたいのはそれだな」

ルークは笑った。

「アイリは仕事に関しては厳しいよ。氷の女王様だからね。正社員になったら今みたいに気軽に話せないかもね」

「そうか？ 準社員でも気軽には話せないみたいだぞ。立場をわきまえなさい、ってお叱りを受けたからな」

今度は声をあげてルークは笑った。

「いいね、最高におもしろいよ」

「まったく難しい女王様だ。昨日は笑い声も聞けたのに、今日はご機嫌斜めのご様子で」

グレディはちろりと隣の男を見た。

「おまえが無意味なお茶を誘うから機嫌を損ねたんじゃないのか？」

「ひどいなあ、僕のせいだって？ グレディが変なこと言っただけだろ。あまり女王様に気安く口を利いてもらいたくないんですがね」
軽く笑ってグレディは空のままだったグラスをガロウに渡した。

「その女王様って美人か？」

「まあね。美人だよ。今度連れてきてあげようか？ でもガロウさんに女性の相手がちゃんとできるのかなあ。いつもの調子だと女王様に怒られるかもよ」

頼んでもいないジョッキをグレディの前に置き、ガロウは豪快に笑った。

「何、女王様ともなれば反って俺みたいなのが珍しくてお気に召すかもしれん」

でも、とガロウは表情を戻した。

「ここらにはあまり連れてこないほうがいい。まあ、ルークも近寄らんほうがいいかもな」

「どうして？ グレディはいいのかい」

「そうか、とルークは手を叩いた。」

「やっぱり美しすぎると危険なんだね。人攫いにあっちゃうとか。うらやましいな、グレディは。何も気にせず、ガロウさんに会えるんだ」

「おい、どういう意味だ」

グレディとルークの様子に小さく笑い、ガロウは違うと否定した。
「そうじゃねえ。最近、ここらにはレイニング社をよく思っていない連中もいるんだよ」

ルークはすぐに理解したようだ。

「工場建設だね」

「そうだ。反対派の連中はここにもいるからな。中には過激な奴も少なからずいる。気をつけたほうがいいってことだ」

「社員が全員賛成だっと思ってほしくないんだけどなあ」

「まあ、けっこうもめたみたいだよな。結局は押し切られたみたいだけだ」

「ん？ なんかグレディ詳しそう。ファルガがもらした？」

「まさか。そんな奴じゃないだろ。自分の部下を信用しろよ」

「冗談だよ。でもなんで知ったような感じなのかな」

「それは、準社員の特権ってやつだ」

直接聞いたことはないが、ふらふらしているうちに自然と情報が入ってくるものなのだ。それらはごく断片でそれだけではなんのこともだかわからないが、建物に漂う雰囲気や巷に出回っている情報からなんとなく読むことができる。

「お前さんは反対みたいだな」

「そうだね。僕自身は反対だったけど、決まっちゃったからね」
どことなくルークの表情が曇った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6353a/>

Imitation Ring

2010年10月10日05時37分発行